

芦屋市立認定こども園・保育所

ICT×教育・保育＝

なにがえぞつ？

令和7年度 ICT 活用実践・考察集 vol.5



市立認定こども園・保育所

ICT 活用検討委員会

はじめに

1990年代後半からのインターネットの急速な普及により、ICT（情報通信技術）は教育・保育の分野でも大きな役割を果たすようになってきました。小学校では、タブレット端末を児童一人一人が持つ時代になり、それぞれの理解度やペースに応じて個別最適な学びが広がり始めています。

一方、就学前の子どもたちの学びとは、どのようなものでしょう。子どもたちにとっては、「遊び」を通じた経験そのものが、学びにつながっています。たとえば、虫を探したり、花を摘んだり、砂場で山や川を作ったり、友達と走ったり、ボール遊びや折り紙をしたりといった多様な遊びの体験が「自己肯定感」「自立心」「協同性」「思考力」「探求心」「創造力」「表現力」「判断力」「意欲」など、子どもたちの生きる力の土台を育み、豊かな学びにつながっていくのです。

芦屋市立認定こども園・保育所では、日々の体験をさらに豊かにし、子どもたちの探求心を引き出し、学びの幅を広げることを目的として、平成29年度より教育・保育活動にICT機器を導入し、効果的な活用を進めてきました。ICTを活用することで、子どもたちの思いや考えをより伝えやすくなり、周囲との共感やつながりが生まれます。また、変化や気づきを可視化することで理解が深まり、遠隔の人と交流する機会も得られるなど、子どもたちの活動の幅が大きく広がっています。

本冊子も今年度で5年目を迎えました。今回もICT機器を活用した日々の教育・保育の実践事例を通して、遊びや体験からどのような力が育まれているのかを考察しご紹介しています。また、「ICTを活用した教育・保育研修会」を通じて職員が学び保育の質の向上につながる内容についてもご覧ください。

はじめに

目次

ICT 活用に係る目的・理由・経過・方針..... 1

ICT 活用実践・考察

第10回 関西教育 ICT 展チャイルドケア2025 登壇報告..... 3

精道こども園..... 5

西蔵こども園..... 7



芦屋市立精道こども園



芦屋市立西蔵こども園



岩園保育所.....9

緑保育所.....11

ICT活用に係る研修会.....13

○思わず心が動き出すICT～見たい、知りたい、伝えたい～

○ICT活用が環境保全につながる!?～幼少期における自然との関わりから育まれるもの～

ICT委員会「いいね！シート」活用事例.....17

芦屋市立認定こども園・保育所 ICT活用検討委員会協議事項骨子.....23

おわりに



芦屋市立岩園保育所



芦屋市立緑保育所



4 方針

実際にタブレットを操作する活動は、対象児童を原則的に5歳児とする。

具体的な活動内容については、4つの市立認定こども園・保育所、それぞれで状況が異なるため、それぞれの状況により検討することとする。

しかし、子どもがICT環境に直接触れる教育・保育活動を展開し、楽しい体験を通じ、従来にない学びや、より興味関心を深める体験につなげることについては、すべての施設で共有することとし、それらを前提として次の要素については、活動内容に応じ、できる限り取り入れるように努めるものとした。

- ・ 協同性
- ・ 広い意味でのICTリテラシー

これらの要素の具体的な保育活動のイメージは、次のようなものである。

- ・ タブレットを活用する場合は、一台を複数人で利用すること。
- ・ ICTを活用する中で、子どもたちがICTの活用に関わるルールに触れること。

これらの方針により各活動を行った。

以 上

第10回 関西教育 ICT 展チャイルドケア2025 登壇しました！

令和7年8月7日(木)・8日(金)

インテックス大阪
セミナーにて



芦屋市長 高島峻輔

職場の先生方とともに、教育・保育現場での ICT 活用に関する取り組みを発信しました。会場では、ICT を活用した保育の実践や、子どもたちの育ちを支える取り組みについて多くの方にご紹介する機会となりました。



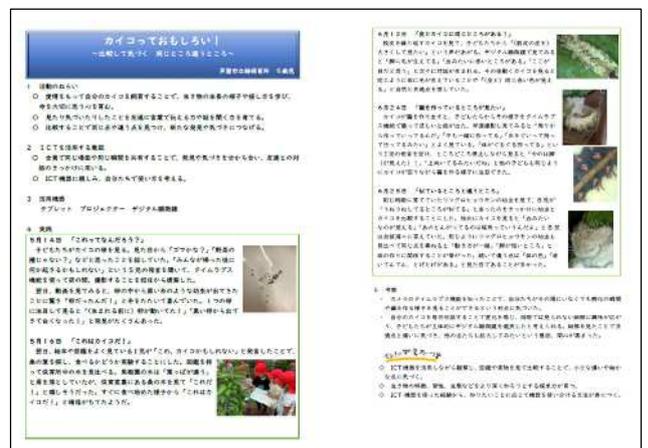
芦屋市立緑保育所5歳児の ICT を活用した保育実践（昨年度冊子に掲載）

「カイコっておもしろい！～比較して気づく 同じところ違うところ～」

実際の保育の写真や事例をもとに、

- ・子どもたちの気づき
- ・保育者の関わり
- ・ICT が果たす役割 について実践報告をしました。

タブレットやデジタル顕微鏡、プロジェクターを使用した実践事例です。



芦屋市のブース展示もありました！



こども園・保育所の教育・保育の様子をドキュメンテーションで発信しています。当日は各園所のドキュメンテーションも展示し来場者の方に好評でした。



【展示内容】

- ・ ICT 活用実践・考察集 vol. 1 ～ 4
- ・ PR ドキュメンテーション集
- ・ ソニー幼児教育支援プログラム保育実践論文
- ・ 給食の人気メニューレシピ など

上記の内容は、
芦屋市のホームページでご覧いただけます。
ぜひご覧下さい。



当日の様子は
インスタグラムでも配信中です。



みんなに教えたい！わくわくパン教室

～ごっこ遊びから広がる友達の「輪」～

芦屋市立精道こども園 5歳児

1 活動のねらい

- 友達と考えを出し合い、工夫したり協力したりして遊びを進めていく楽しさを味わう。
- ごっこ遊びの中で異年齢児と関わりをもち、思いやりの気持ちを育む。

2 ICTを活用する意図

- 写真を通してイメージを明確化し、友達とのやりとりを楽しむことができる。
- 写真や映像で撮影したものをみて振り返り、次の遊びの展開を話し合うことができる。

3 活用機器

タブレット カラープリンター

4 実践

7月上旬

他クラスのごっこ遊びを見たA児が「お店屋さんを皆でしたい」と提案したことをきっかけに、パン屋さんごっこが始まる。まずは自由遊びの時間に空き箱、包装紙などの素材や紙粘土でパンを作って少人数で遊んだ。完成したパンを飾っていくと、「私もしたい」とパン作りを始める子どもが増え、クラス全体の活動につながった。

7月8日～ 「パン屋さんに必要なものは何？」

子どもが作ったパンが増えてきたため、保育教諭が事前に用意したパン屋さんの外観や店内の写真を見ながら、開店に向けて何が必要かを話し合う。「パンの名前が書いているカード」「看板」「トング」等、写真を見て気づき、自分の経験を思い出して発言していた。食べるスペースも必要だという案から、ジュースやコックの帽子を作りたいとイメージが広がっていった。必要な道具や様々なパンが完成すると、自由遊びの時間にお店の人とお客さんに分かれてごっこ遊びが始まった。

ごっこ遊びが進むと、「もっとわかりやすいメニュー表もほしい」と意見が出る。特にジュースは文字だけでは分かりにくく「写真を載せるのは？」と意見が上がり、作ったジュースを撮影し、印刷をした。まずはクラス全員でパン屋さんとお客さんに分かれて遊ぶ。パン屋さんとお客さん以外にもタブレットで様子を撮影するカメラマン役も作った。どちらの役も経験した後、子どもが撮影した写真や映像を見ながら振り返りの時間をもった。客観的に振り返ると、パンを焼く人、売る人、レジをする人と役割を分担したが、パン屋さんが混雑していたことが分かった。待ち時間が短くなる方法を考えると、パン屋さんの隣に一緒にパンを作る「わくわくパン教室」を開きたいと案が出る。粘土なら繰り返し作ることができ、自分たちの



作ったパンを教えることができると考え、新たに教室を開くことにした。カメラマンの子どもも自分の撮った写真を見ることで、自分もやってみたいとやりたい役を見つけて遊ぶことができた。



7月15日「パン屋さんとわくわくパン教室 オープン！」

隣のクラスを呼び、パン屋さんを開く。全員がお店屋さんを経験した後、振り返りをすると「お客さんいっぱいだったよ」「楽しかった」と良かった点も多かった。しかし、初めてのパン教室では「うまくパンを教えられなかった」と困った点も出てきた。自分の経験を言葉だけで伝えることが難しく、困ったようだった。お客さんも言葉だけでは分かりにくい様子だったことを保育教諭が伝え、どうすれば皆が伝えやすくお客さんに分かりやすくなるかを考えた。「やっぱり写真かな?」「作り方を順番に書いたらみんな分かる?」と写真を撮り、メニュー表を作った経験を思い出した意見が出てきた。そこで、お客さんが写真を見ながら作りたいパンを決めることができる説明書カードを作ることにした。

説明書カードを選びやすいように並べ、パン教室を開く。「どんなパン作りたいですか?」「こうやって作るんだよ」とお客さんとペアになり説明していた。前回とは違い、写真があることでより具体的に伝えることができた。振り返りの時間に話を聞くと「いっぱいパン作ったよ」と誇らしげだった。次の日にはこども園の全クラスがお客さんとして来てくれ、一人一人に寄り添うパン屋さんとパン教室になった。



5 考察

- ・ タブレットを活用することで、クラスで明確なイメージを共有することができた。
- ・ 遊びの中に写真（メニューや説明書）を活用することで、相手に伝えたいことがより分かりやすく伝わり、さらにごっこ遊びが盛り上がった。
- ・ 映像を加えて遊びを振り返ることで、クラス全体でも遊びの全体像がイメージしやすくなり、やりたい役を見つけることができ、遊びの活発な振り返りができた。また、カメラマンとして参加し、写真を通して友達の姿を見ることで、なりきってみたいという意欲につながった。他の子どもも新たな役割としてカメラマンが増え、毎日の振り返りに活用できた。個別の関わりの一つの中にタブレットがあり、支援の方法の一つになった。

やまにがそなつ?

- ◇ タブレットを活用することで、イメージが明確化し、友達と協力しながら活動が進められ、話し合う力やなりきって表現する力が育つ。
- ◇ タブレットとカラープリンターを活用することで、初めて遊ぶ子どもや低年齢児に対しても工夫して伝えることができるようになった。

いきもの だいすき！

～もっと見たい、知りたい、なんでだろう？～

芦屋市立西蔵こども園 4歳児

1 活動のねらい

- 生き物の飼育を通して、思いやりの気持ちをもつ。
- ICT 機器を使った活動を通して、アオムシの成長に気づき、興味・関心を深める。
- 気づいたことを、友達や保育教諭に伝える喜びを感じる。

2 ICT を活用する意図

- 普段見ることができないアオムシの成長段階をじっくりと見ることができる。
- 肉眼では見えにくいアゲハチョウやアオムシの細かい模様や部位などが観察できる。

3 活用機器

ファイバースコープ タブレット プロジェクター カラープリンター

4 実践

4、5月～「アオムシをそだててみよう（くま組、いるか組）」

4歳児クラスの子どもたちは、春から植物や生き物、天気など、様々なことに興味をもっている。他クラスがアオムシを飼育している姿を見て、家から持って来たり、園庭にあるミカンの木にいるアオムシを見つけたりしたことから、クラスで育てることにした。

5月下旬 「ファイバースコープでみてみよう」

子どもたちは「アオムシが食べた葉っぱ、お団子みたいな形してる」「食べた音聞こえる？」など、アオムシが葉っぱを食べる姿に興味をもっていった。そこで、より子どもたちの興味が深まればと思い、それぞれのクラスでファイバースコープを用いてアオムシの様子を見ることにした。

【くま組】

くま組の子どもたちは、ファイバースコープで拡大されたアオムシを見て「アオムシの赤ちゃんだ」「クラスのものにも見せたい」と心が動いていた。

【いるか組】

いるか組の子どもたちは、ファイバースコープで拡大されたアオムシには心が動かず、虫かごの中にあるアオムシが葉っぱを食べながら動く様子や枝に上っていく姿など、実物を見ることを楽しんでいた。



6月初旬 「さよならする？お世話する？」

アオムシを飼い始めてから、黒の幼虫→緑の幼虫→サナギ→アゲハチョウになるまで、

それぞれのクラスで見守った。部屋で初めてアゲハチョウが生まれた日、このアゲハチョウをどうしたいのか、それぞれのクラスで話し合いをする。

どちらのクラスも「外は危ないから部屋で飼いたい」「外に出たいんじゃない？」と意見が分かれた。お世話の方法も考えたが、飼育ケースの中に入れたままのアゲハチョウを外に連れて行くと、中で激しく飛び始めた。その姿を見て「お世話をしたい」と言っていた子どもも「早く逃がしてあげよう」と言い、逃がすことになった。



6月11日 「あおむしシアター」

それぞれのクラスで黒い幼虫→緑の幼虫→サナギ→アゲハチョウに成長する動画をタブレットで撮影できたため、スクリーンとプロジェクターを使い「あおむしシアター」を行った。黒い幼虫が脱皮をして緑の幼虫になっていく様子を見て「皮脱いだ!」と喜び、サナギの下に落ちている点々を見て「脱いだ皮だったんだ」と気づくなど、心が動いていた。



いるか組は、スクリーンに大きく映ったアオムシに興味をもったため、5月には興味をもたなかったファイバースコープを再度使用してみることにした。すると、拡大されたアオムシの画面を見て「緑色の線がある」と肉眼では見えにくい発見を楽しむ姿があった。



5 考察

- ・ ICT 機器を使用し、子どもが興味をもっていないと感じた時は、思い切って引き、子どもの姿に合わせ、時期を改めて使用することで、「もっと見たい」「もっと知りたい」「なんでだろう」という興味や関心が深まり、探求心につながるのではないかと考える。
- ・ 色や形が日々変化していくアオムシを育てたことで、「見る」から「観る」へと見ようとする意識が変わった。自分が発見したことを友達に伝えて共感してもらい、また友達の発見を聞くことで、感動を共有する嬉しさを感じ始めている。

なにがええっ?

- ◇ 子どもの興味に合わせて、ICT 機器を活用することにより「見る」から「観る」へ物事を見ようとする意識が変わる。
- ◇ 気づいたことや感じたことを伝え合うことが、様々なことへの関心の高まりにつながり、自ら関わろうとする力が育つ。

めざせ！カイコ博士！

～ICT 機器を使って観察すると カイコのことがもっと好きになった！～

芦屋市立岩園保育所 5 歳児

1 活動のねらい

- カイコの飼育を通して、愛情や責任を感じ、命を大切に思う心を育む。
- 生き物との触れ合いを通して、生態系の不思議に気づき、観察力や探求心を育む。
- 体験したことを、保育者や友達に言葉で伝えるコミュニケーション力を育む。

2 ICT を活用する意図

- 普段見ることができないような変化を捉えることで、興味関心を高める。
- プロジェクターで拡大して映すことで、発見や気づきを分かち合う。
- ICT 機器に親しみ、興味関心事を調べる方法を知る。

3 活用機器

タブレット プロジェクター デジタル顕微鏡

4 実践

5月29日 卵の色が変わる！？【タイムラプス機能】

例年行っているカイコの飼育が今年度の5歳児クラスでも始まった。卵から孵ったケゴ(生まれて間もない幼虫)が多くいる箱の中に、A児はまだ卵があることに気づいた。保育者は事前にタイムラプス機能を使い、カイコが誕生する様子を撮影していたため、A児の発見に共感し、誕生の様子の動画をプロジェクターに映し出して見ることにした。



卵が多く着目しづらかったため、拡大して映し出し、スピードを手動で調整する等の工夫をし、一つの卵に絞って見た。そうすることで、「生まれた！」と気づくことができた。「卵の中で丸まっている」「頭から出てきた」と伝え合う中で、B児は画面の中に白色と黒色のものがあることに気づき、「黒は自分ってことじゃない？」と話す。「(幼虫が)入っている時は(卵の色は)黒だけど、出たら白になったから。黒は(幼虫が)丸まっている時！」と付け加えた。それを聞いたA児は「白は全部生まれたやつ(=殻)なんだ」と納得した。

6月11日 いろいろな虫のウンチ比べ【デジタル顕微鏡】

カイコの飼育が進み、体の大きさと比例してカイコの糞も大きくなってきたことに気づいた子どもがいた。デジタル顕微鏡を使い、カイコの糞を映すと「ダンゴムシのウンチみたい」と話

した。前日に脱皮した殻を糞だと話す子どももいたため、ウンチ比べをすることにした。カイコやダンゴムシ、アオムシなどの生き物の糞を拡大して見ることで色や形の違いだけではなく、撮った写真を見比べることでより違いに気づくことができた。

カイコのウンチ



- ・ 黒色
- ・ レーズンみたい
- ・ 長四角
- ・ 白いところがある

ダンゴムシのウンチ



- ・ 紫色
- ・ 岩みたい
- ・ チョコレートみたい
- ・ カイコと色が違う

アオムシのウンチ



- ・ 茶色
- ・ 形は丸
- ・ クッキーみたい

7月4日 繭はどうなっているんだろう？【デジタル顕微鏡】

カイコの幼虫が大きくなり、少し前から個人飼育が始まった。週末に家庭に持ち帰り自分で世話をすることで愛着が湧いてきた頃、数匹のカイコに変化が現れた。「糸を出していた！」「これが繭！？」と喜びや驚きを伝え合う。C児によるアイデアで、デジタル顕微鏡を使って繭の表面を見てみることにした。



《C児が撮影した写真》



デジタル顕微鏡は拡大しながら写真を撮ることもできる。これまで保育者が撮影していた姿を見ていたC児は「自分で写真を撮ってみたい」と話し、繭の表面を拡大して写真に記録した。糸が重なり合っているところを見て、「キラキラしている！」と嬉しそうに友達と話していた。自分たちでICT機器の使い方を探りながら活動を進めていく中で、目や気門(息をする所)、お尻等、体の細部にまで関心が高まっていった。

5 考察

- ・ 初めて出会ったカイコを知っていく上で、慣れ親しんでいるダンゴムシやアオムシの知識をもとに予想や比較をし、ICT機器の活用が、より好奇心を高めることにつながった。
- ・ 一つのテーマを通して、タイムラプス機能やデジタル顕微鏡等、様々なICT機器の使い方を知ったことで、子ども自身が機器を扱う(写真撮影)ことへの意欲が増した。

たにがそまつ

- ◇ ICT機器を使うことで、知りたいポイントを絞って鮮明に観察できる。新たな発見や興味関心が高まるきっかけになり、探求心が育つ。
- ◇ ICT機器を使った活動によって、得た知識を周りの人に伝える意欲が増し、コミュニケーション力が育つ。

みどりっこ盆踊り大会！

～手作り花火を打ち上げよう～

芦屋市立緑保育所 4・5歳児

1 活動のねらい

- 花火の音をイメージし、異年齢児と協力して音を探す面白さや作る楽しさを味わう。
- 友達と考えや思いを言葉で伝え合い、遊びを展開する達成感や充実感を味わう。
- ICT 機器を使って活動を深め、好奇心や探求心につなげる。

2 ICT を活用する意図

- 音を録音して重ねることで複雑な音を作り、映像と組み合わせることができる。
- ICT 機器を活用し、臨場感や迫力のある映像を見ることで、疑似体験ができる。
- 写真で記録することで保護者など参加していない人とも楽しさを共有できる。

3 活用機器

タブレット プロジェクター

4 実践

7月17日 「花火ってどんな音？」

8月の盆踊り大会に向けて準備を始める。本物の花火を打ち上げたかったが実際には難しく、声で花火の音を再現しようとしていた。子どもの発想から、身近なものを使って花火の音集めをし、タブレットで録音することにした。すぐに「なかよしペア（4・5歳合同のペア）」で音集めが始まる。はじめは楽器を鳴らすことや体を使って音を出そうとする様子が多かったが、次第に「これ落としてみたら？」「この壁叩くのいいかも！」と自分たちでアイデアを出し合い、試行錯誤していた。タブレット操作は主に5歳児が行い「せーの」と自分たちでタイミングを合わせながら録音していた。



《子どもたちの音集めの例》

A 児のグループ：声だけで「ひゅ～」 「ばーん」と表現する

B 児：シンバルを連続で鳴らす、ハンドベルを鳴らす

C 児：カプラをアルミの蓋に落とす

D 児：空の収納ケースを叩く

E 児：ビニール袋を揉む



最後に全員で音集めをする。強くジャンプし床を鳴らす、椅子を引きずる、手で壁を叩く、カプラを鍋の蓋やタライに落とすなど思い思いに音を鳴らしていた。その後録音した音を聞いてみると「すごい大きな音だね」「花火の音に似てるかも」と話すが、手応えはあまりないようだった。

7月30日 「みんなで見てみよう」

子どもたちの集めた音を保育者が編集アプリを使って編集し、花火の映像と組み合わせた。早速、子どもたちに見せると、「すごい！」「これ僕の音だ！」と大興奮で、釘付けになっている。映像と組み合わせることで子どもたちの集めた音も臨場感が増し、本物のように聞こえているようだった。天井に映し出していたため、寝転んで見ることで「本当の花火みたいだね」と喜んでいた。



8月6日 「みどりっこ盆踊り大会」

いよいよ当日。受付や案内係、司会進行、太鼓を叩くなどの役割に分かれ、自分の役割を果たそうとはりきっている。緊張する子どももいるが周りの友達の頑張る姿が見本や励みとなり少し後押しするだけで参加することができる。0～5歳児が一堂に会し、盆踊りを踊り、その様子を5歳児が写真に撮る。ピントを合わせたり、楽しそうな様子を撮ったりと真剣な表情だった。最後は花火を保育所の全員で見る。「寝転んで見るのがおすすめだよ」という司会者の言葉で年下の子どもたちも寝転んで楽しむ。子どもたちだけでなく職員からも「おー！すごい！」「本当に花火大会に行ってみたみたい」とロ々に感想がでてきて自然と沸き起こるアンコールの声に誇らしげな笑顔になる。部屋に戻って4・5歳児で振り返りをした時に緊張していたF児が「あの時頑張ってたよ良かった」ととても嬉しそうに言っていた。どの子どもも達成感があり、「楽しかったね」「またやりたいね」と顔を見合わせて話していた。



※子どもたちが実際に作った音はこちらからお聞きください。→



5 考察

- ・ 一つ一つの音を重ねたり、録音したりすることで違う聞こえ方をすることに気づき、さらなる試行錯誤や工夫、発見につながった。
- ・ 実現が難しいことも、みんなで知恵を出し合ったり、ツールを活用したりすることで似た体験ができることを知り、好奇心や探求心につながった。
- ・ 多くの人に認められることで自信となり、達成感や満足感を味わった。

やまにがそまつ

- ◇ 子どもたちがICT機器を活用しながら遊びを展開していく中で、主体的に伝え合い、助け合う力が育った。
- ◇ 実体験を基にイメージしたものを共有し、皆で一緒に一つの行事を作る協同性が育った。

令和 7 年度 ICT を活用した教育・保育研修会

思わず心が動きだす ICT ～見たい、知りたい、伝えたい～

日時 令和 7 年 7 月 8 日（火） 午前 9 時 30 分～午前 11 時 30 分

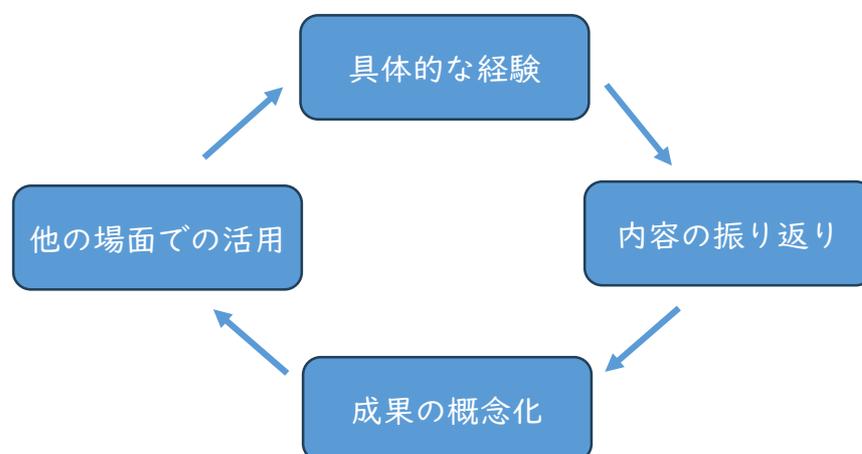
場所 西蔵こども園

講師 園田学園大学 こども学部 こども学科 堀田 博史 教授

○幼児教育において

・幼児教育において以下のサイクルがある。このサイクルは、子どもたちのペース・子どもたちのやり方で進めることができるというメリットがある。

- ① 具体的な経験…“触る、匂う、味わう、見る、聞く” 経験を通して、「比較・分類・関連」することで、子どもたちの思考力の芽生えに繋がっていくため、意識的に問うことが大切である。
- ② 内容の振り返り…具体的な経験から子どもたち同士で振り返る。振り返りが子どもたちの言葉で言語化されると、成果を概念化させる時につながる。
- ③ 成果の概念化…経験して発見したことを友達や先生に共有する。
- ④ 他の場面での活用…概念化させた内容を他の場面でも共有する。



○最近の子どもたちの姿から

・小学生は、「声の大きさに気をつけて話すことができる」能力は高いが「人の話を聞き、質問を考える力」が低下しているというデータがある。幼児期から自分の思ったこと（感想）を言語化できる力が大切である。そのため、保育教諭は、常に子どもたちが安心して自分の心の中を出せる環境づくりと感想や質問、疑問をもたせる問いかけを意識していく。

・学びに向かう力の中で「文字・数・思考の育ち」は年々伸びるが、「自己抑制」が弱い子どもが多い。自己抑制を強くするために、“どんなことに対しても自信をもって取り組める・取り組んだ”という経験を多く積みせ、その自信をもった瞬間を保育教諭が写真におさめ（ICT 活用）、その瞬間を振り返ることが子どもの自信につながる。

○これからの時代を見据えた教育内容について

① アクティブラーニングの推進

主体的で対話的な学び、子ども同士で学びあうこと

② ICT を活用する

幼児教育では、子どもたちが写真を撮ることが ICT の活用であり、写真におさめた疑問点や発見を友達に伝える時に使用する。保育教諭は、タブレット端末を活用して保育におけるポイントや子どもたちが振り返りやすいような写真をおさめておくことが求められる。

③ 新たな価値を生み出す創造性

園外・地域の方やテレビ電話で専門的知識をもつ方・外国の方等、多様な他者とつながることで新たな価値を生み出すことができる。

④ 時に優れた才能を有する人材の発掘・育成

保育教諭は、子どもたち一人一人の芽生えている才能を伸ばすことが求められている。

○自分の思いを言語化するため、小学校では…

- ・ 1 分間スピーチ…低学年の活動。週末、持ち帰ったタブレットを使って休日の出来事について写真を撮る。月曜日の 10 分朝活の時にペアでタブレットを見せながら話をしたり、感想を伝えたりする。
- ・ デジタル日記…帰りの時間等、5 分で日記を書く。

○最後に

	課題や疑問 (問いをもつ)	解決の方法を決定 (見直しをもつ)	計画をたて結果 を予想(実行・ 振り返る)	作業を分担 (個別・協同する)
展開 1	保育者主導	保育者主導	保育者主導	保育者主導
展開 2	保育者主導	保育者主導	保育者主導	幼児主導
展開 3	保育者主導	保育者主導	幼児主導	幼児主導
展開 4	保育者主導	幼児主導	幼児主導	幼児主導
展開 5	幼児主導	幼児主導	幼児主導	幼児主導

教育には、様々な場面において保育者主導になったり、幼児主導になったりする。その展開は表のように五つに分けられる。保育教諭は、活動によって様々な展開の保育をすることで、将来子どもたち同士で振り返る時、適切な展開を見極め、子どもたちのやり方やペースで振り返ることができるようになっていく。

令和7年度 ICT を活用した教育・保育研修会

ICT 活用が環境保全につながる！？ ～幼少期における自然との関わりから育まれるもの～

日時 令和7年6月16日(月) 午前10時30分～午前11時30分

場所 岩園保育所

講師 神戸女学院大学 生命環境学部 生命環境学科 たかはし 高橋 だいすけ 大輔 教授

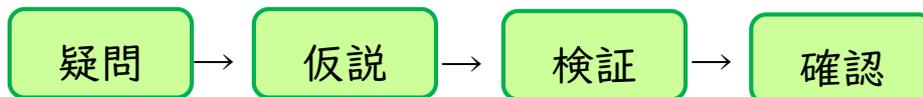
○幼少期における自然との関わりから育まれるもの

《これまで3年間継続した5歳児との活動に対する評価》

- (1) カイコの飼育・・・身近な生き物であり、良い教材である。
- (2) 仲ノ池での生き物探し→写真撮影→マイ図鑑(アプリ)にまとめる。

実際に子どもが発見した例

- ① ダンゴムシが脱皮している→なぜ土の中にいるのだろうか？
→アリの食べられないようにするため。
- ② アリの幼虫を見つけた→よく観察してみるとクモだった。



★この4つの項目の経験が大切である。まずは”観察する”ことがポイントになる。

○環境意識について

- ・2016年 環境省のアンケート調査では、環境に目を向ける企業が増加している。環境はお金にならないという考え方は変化し、環境への配慮は利益追求に不可欠な時代になった。

○生物多様性について

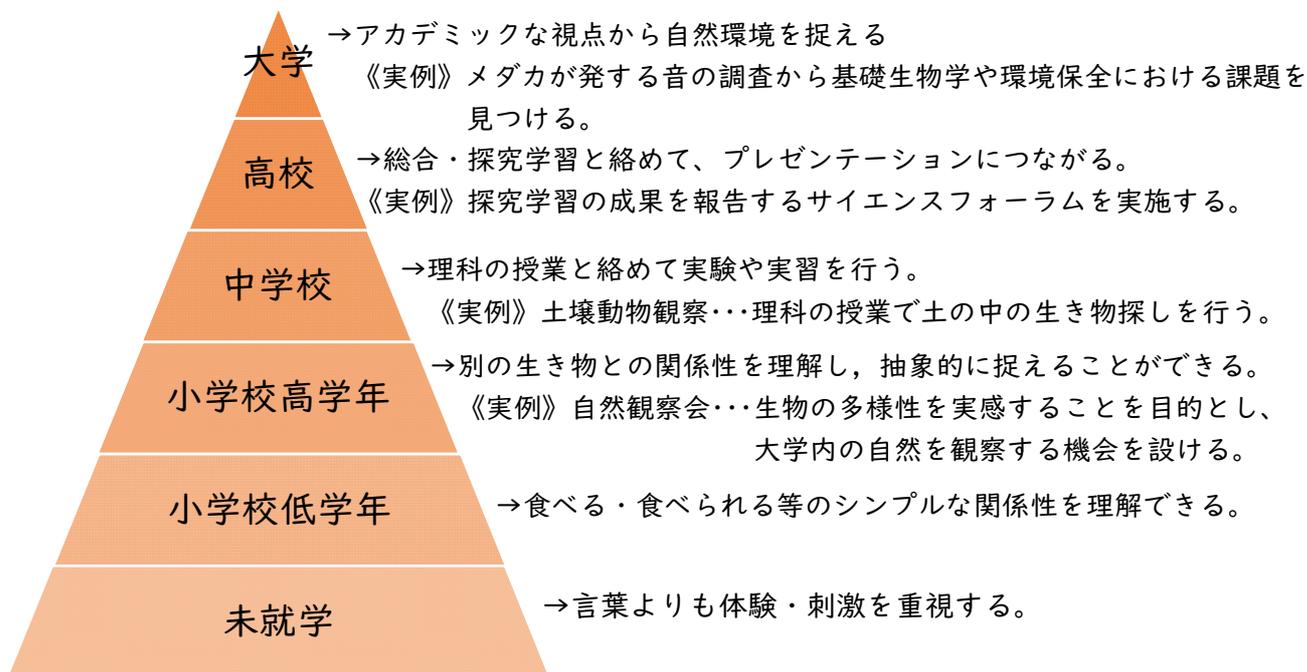
- ・同じ生物でも一つの種類に絞って比較すると、個性がある。それはそれぞれの遺伝子があるためである。
- ・広く見た自然環境の多様性もあれば、ミクロな世界での個の種の多様性があり、全てをまとめて“生物多様性”と呼ぶ。



★世界中で持続可能な形で守っていかなければ、この生物多様性は壊れてしまうため、保全の取り組みが必要になる。保全の取り組みに必要なものとは・・・？

○環境保全につながる環境保育とは？

環境保育・・・自然環境や環境問題への理解を深める活動である。



★未就学児も学生も行動自体は同じである。大学ではより複雑なことをしているだけであり、行動することが環境保全にとって大切である。

- ・しかしながら、自分の生活との関わりが分からず、価値が分からないと行動を起こすことは難しい、生き物に対して苦手意識があることで、生物多様性保全の難しさがある。
⇒未就学児からの段階的な学びが解決の糸口になるのではないか・・・？

○ICT活用と環境保全の関係性について(高橋教授の話を聞いた職員の見解)

未就学児においては、体験の中で五感を通した気づきから生物に関心をもち、探求する心が育まれていくと考える。例えば、ICTを活用し、

細かいところまで
拡大して見ることができる

比較できる

などの体験を友達と共有することができる。

環境に関わることに於いて、“観察する”経験(体験)が大切であり、その後の子どもたちの主体的な学びを深めるための“探求”の段階で、ICTを活用すること(タブレットを使った写真の記録、アプリの活用)がより効果的になると考えられる。

精道こども園 5歳児 4月17日(木)	
育てたい力	様々な気付き 発見の喜び
その機器を選んだ理由	自分の顔を見ながら描けるため
活用機器	タブレット(カメラ)
<ul style="list-style-type: none"> 歯のポスターで、歯磨きしている自分を描く。自分の歯並び、表情を見て描けるよう写真を撮り、印刷して描くことにした。今年度初めて、全員がタブレットを使って写真を撮るため、撮る時のポイントを話した。タブレットは紐をかけて持つ約束や被写体(友達)にピントを合わせる方法などを伝えた。歯がよく見える表情を聞き、二人組で「あ」「い」の表情を撮り合った。写真を撮りながら「『あー』ってして」と声をかけ合いながら撮っていた。 撮った写真を印刷し、写真を見ながら自分の顔を描いた。「歯はこんな形」「僕の口、こんなに大きいんだよ」と口の大きさを意識して描いていた。写真を印刷したことで、すぐに撮影した写真を見ることができ、時間をかけて丁寧に描くことができた。 	
	
精道こども園 3歳児 6月9日(月)	
育てたい力	様々な気付き 発見の喜び
その機器を選んだ理由	肉眼では見えにくいものを拡大して共有できるため
活用機器	大型テレビ デジタル顕微鏡
<ul style="list-style-type: none"> 正体を明かさずにオタマジャクシの世話を始めた。オタマジャクシの正体がカエルだとわかるとさらに興味をもち始めた。カエルに成長したことに気づき、カエルが飼育ケースにくっついていてよく見えないと感じ始めている子どももいた。そこで、今回もデジタル顕微鏡で拡大して見てみることにした。 「どうやって壁にくっついているのかな？」と問いかけると、「おててじゃない?」「脚もあると思う」とつぶやいている子どももいた。拡大された手が映ると「〇〇ちゃんのおててみたい!」と自分の手を開いて見比べている子どももいた。 翌日、カエルを飼育ケースから出しジャンプする姿を見た。「カエルの手はどうだった?」と問いかけると「パーしてた!」としっかりと手を開いて床につき、ジャンプを楽しむ姿から表現遊びへと発展していった。 	
	

精道こども園 4歳児 7月12日(火)

育てたい力	様々な気付き 発見の喜び
その機器を選んだ理由	図鑑には載っていないことを調べることができ、比較が簡単にできるため
活用機器	タブレット

- 子どもが育てたいと家から持ってきたスイカの種をクラスで育てている。種からの発芽、畑への移植を経て、畑での栽培を楽しんでいる。クラス内で種調べが始まり、家庭の協力もあってクラス全員が調べたい種を園に持ってきた。
- 一人一枚ずつ種図鑑(主にぬりえ)を作成している。タブレットで画像を検索し、気になる部分は拡大して観察していた。肉眼では気づかなかったところもタブレットを使用して拡大することで、花びらや果実などの細かい部分の色や形に気づいていた。



精道こども園 5歳児 3月5日(水)

育てたい力	様々な気付き 探求心
その機器を選んだ理由	動作をゆっくり確認し、回すコツを見つけられるため
活用機器	タブレット(ビデオ、スローモーション撮影)

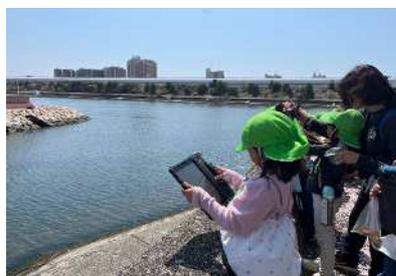
- チャレンジ遊び名人花チャレンジで、こま回しに挑戦する子どもが多かった。ただ回すだけでなく、小さな板の上で回す、板をもって回すなど自分たちで技を作って挑戦し、遊びが発展していた。
- 板をもって回す技はA児しかできず、自分とA児のこま回しの違いを見つけようとしていた。それぞれをビデオ撮影し見てみると、A児は弧を描くように回していることに気づいた。より具体的に違いを見つけようと、A児をスローモーションで撮影した。A児を含めて見てみると「手を後ろにしてから回してる」「こまはまっすぐ(床と平行)のまま投げている」等、気づいたことを共有した。繰り返し見た後、ポイントを意識すると板を持って回せる子が出てきた。一人できるようになると、友達も刺激を受け、こま回しがさらに発展していった。



西藏こども園 5歳児 4月3日(木)

育てたい力	言葉による表現 自然との関わり
その機器を選んだ理由	自分の気に入った景色をみんなに伝え、共有するため
活用機器	タブレット プロジェクター

- 春探しをして、見つけたものを共有することを伝え、出掛ける。「サクラだ！」と春を発見すると、花びらを集め匂いを嗅ぎ、大切に花びらを持ち帰る。またプランターに植えられた花にも注目する子どもがいた。持ち帰ることが難しいものは写真におさめたらよいことを知らせると、早速子どもたちはタブレットで写真を撮っていた。他にもユキヤナギを見て「雪みたい」とつぶやく友達の声を聞き、興味をもった子どもたちがタブレットを向ける。
- 散歩後に、持ち帰ったものや撮った写真をプロジェクターを使ってクラスで共有する。タブレットは自分の気に入った景色等、持ち帰ることが難しいものを写真におさめて、友達と共有できる道具だと知ることができた。後日子どもたちはあじさいや綺麗なものを見つけると、「友達に見せたいな」「撮りたいな」とつぶやき、友達と好きなものを共有したい様子が見られた。



西藏こども園 5歳児 6月6日(金)

育てたい力	言葉による伝えあい 自然との関わり
その機器を選んだ理由	子どもたちが興味をもった場面を共有するため
活用機器	タブレット プロジェクター

- 打出商店街につばめがいることを聞くと「見たい」と興味をもったため見に行く。つばめの巣にいたひなを観察し「くちばしが黄色い」「赤ちゃんが4人いる」と発見したことをつぶやく。しばらく見ていると、親つばめが巣を行き来しながらエサを運ぶ姿に出会った。子どもたちは「リレーしてるみたい」「何か声が聞こえる」と興味深く見ていたが、距離があり子どもがいる場所によっては見えにくい場所もあった。クラスで同じ場面を共有したいと考え、タブレットで撮影し、園に戻ってからモニターに映して見る。「シャーシャーって聞こえた」「ピーピー言ってる」という鳴き声や、エサを運ぶ様子に気づいて「こうやってしてる」と思わず体を動かした。そこで、親つばめやひなになり、つばめごっこをして遊んだ。遠くて見えにくかった部分が、映像によって具体的に分かり、言葉では伝えられない思いを思わず体で表現したくなったと考える。



西蔵こども園 4歳児 9月19日(金)

育てたい力	様々な気付き 言葉による表現 目的の共有
その機器を選んだ理由	写真にすることで振り返ることができるため
活用機器	タブレット
<ul style="list-style-type: none"> たこ焼き、焼きそば、お好み焼き屋さんのごっこ遊びをし、園内の他クラスをお客さんとして招待して楽しむ。子どもたちと相談し、店員役のほかにも、お客さんの様子を撮影する「カメラマン」の仕事を加えた。子どもたちはタブレットを持ち、自分の撮りたい場面を撮ることが新鮮で、「みんなが並んでるところ撮った」「おいしそうに食べてたよ」など楽しんでいる様子が見られた。 子どもが撮影した写真を印刷し、保育室に招待したクラスごとに分けて掲示する。「私が撮った写真」「お客さんいっぱい来たよね」と写真を見ながら友達同士で話す姿が見られた。ある子どもは、「〇〇組さんも呼びたい」と話す。掲示した物を見ることによって、まだ招待していないクラスに気づき、お店に呼びたい気持ちにつながったのではないかと考える。自分たちが撮った写真を飾ってもらう嬉しさに加え、遊びの楽しさの共有や子ども自身が気づききっかけにもつながった。 	



職員活用事例 西蔵こども園 職員 8月21日(木)

利用目的	大津波警報発令時の避難先までの避難経路を共通理解し、安全に子どもを避難させるため
活用機器	モニター パソコン 地図アプリ (パノラマ写真)
<ul style="list-style-type: none"> 大津波警報発令時に行う水平避難の訓練に向けて職員で避難ルートの確認を行う。昨年度までは紙の地図を見ながらルートの確認を行っていたが、職員の人数も多く、それぞれの解釈で食い違いが起ったことが反省だった。そこで、視覚的に分かりやすいように、地図アプリのパノラマ写真を見ながら、ルートの確認を行う。 点呼をする場所や、歩道橋、高架下が通れなかった場合の通り道なども、写真を見ながら確認することができ、初めて避難する職員ともイメージを共有することができた。 	



〈当日の避難の様子〉



岩園保育所 3歳児 6月10日(火)

育てたい力	観察力 自然現象への関心
その機器を選んだ理由	普段見ることができないような変化を捉えらえるため
活用機器	タブレット
<ul style="list-style-type: none"> ・ クラスでアゲハチョウを飼育して2頭目が無事に羽化した頃、子どもたちは「この(絵本の)アゲハチョウと一緒にだね」「こんなのになっているの?」と言いながら羽化する様子と絵本の写真を照らし合わせて予想していた。そこで、羽化する様子をカメラのタイムラプス機能を使い、夜間に撮影した。 ・ 羽化する様子の撮影に成功し、子どもたちと見ることにした。タイムラプス機能の動画と等倍速の動画の二種類を活用したことで、全体的な羽化の様子と羽化後に羽を広げるゆっくりな動きを選択しながら観察することができた。さなぎから出る様子に子どもたちはとても驚き、その後の表現遊びでは、観察したアゲハチョウのように力強く押し出る表現をしていた。 	
	

岩園保育所 2歳児 7月18日(金)

育てたい力	様々な気づき 言葉による表現
その機器を選んだ理由	経験したことを会話のきっかけにつなげることができるため
活用機器	タブレット
<ul style="list-style-type: none"> ・ クラス活動を通して経験したことを話すきっかけになってほしいという担任の願いから、活動の様子を写真を保育室の子どもの目が届く場所に飾っている。今回は、絵の具を使った遊びの様子を飾ることで、「ぬりぬり(色塗り)したね」と保育者に伝えに来る姿や子ども同士で写真を指さして笑いあう姿があった。 ・ 別の日には、実ったトマトの写真飾った。暑さのために戸外へ出られず、子ども自身がトマトを収穫することが難しい状況であっても、トマトの写真と保育室のガラス戸から見えるトマトの苗を見比べながら、生長に心を寄せている姿が見られた。 	
	

緑保育所 4・5歳児 5月26日(月)

育てたい力	観察力 探求心 様々な気付き・発見の喜び
その機器を選んだ理由	肉眼では見られないものを見るため 全員で発見を共有するため
活用機器	プロジェクター タブレット デジタル顕微鏡
<ul style="list-style-type: none"> ・ 予定通りに卵からカイコが孵る。カイコかどうか分からなかったが、5歳児が絵本や図鑑で調べ、全く同じ写真から確信を得る。絵本ではカイコの体に毛が生えていると載っていたが、肉眼では見られずにいるとH児が「わくわくスコープで見てみよう」と提案した。 ・ 4歳児も誘いを受け、一緒にカイコを見る。カメラで卵を追っている最中、まさに孵化しようとしている卵を見つける。全員が釘付けだった。「卵の中で(カイコ)がぐるんってなってる」「あれが頭かな?」と次々に話す。カイコがゆっくりと卵から出てくる様子を見て「がんばれ」と自然に声が出てくる。もう一匹のカイコが近寄ってくると「お手伝いに来たんだ」と喜んでた。 ・ 桑の葉が必要だと知ると、4歳児が「見たことある」「それ畑の木だよ」と5歳児に伝えていた。5歳児の役に立ちたいという気持ちもあり、その後畑に行くと桑の葉を取り、「これびわ組さんの(桑の)葉っぱじゃないかな」と気にかけていた。 	
	

緑保育所 5歳児 7月8日(火)

育てたい力	探求心 好奇心 人とのつながり 知らなかったことを知る喜び
その機器を選んだ理由	離れた場所でも顔を見合いながら互いに交流することができるため
活用機器	モニター タブレット
<ul style="list-style-type: none"> ・ カイコの飼育を通して、桑の葉には栄養があること、薬としても用いられることがあることを図鑑で知る。そこから桑の葉に注目し始め、家庭でも話題になり保護者と一緒に桑の葉を使ってできることを調べてくる子どもが続々とでてきた。その中に「桑の葉石鹼」があがり、作ってみたいという話になる。石鹼屋さんのSさんとライン電話で繋ぎ、まずは石鹼についての素朴な疑問を聞いてみた。石鹼はなぜ泡が出るの?、石鹼によって臭いが違うのはどうして?、石鹼の種類(泡、固形、液体)が色々あるのはなぜ?等たくさんの疑問を解消することができた。そして、桑の葉にはリラックス効果をもたらす成分が入っていることを教えていただき、更に石鹼作りに期待を寄せた。 ・ 翌週、手作り石鹼教室をしているK先生に来ていただき、石鹼作りをする。Sさんから教えていただいたことを基に、桑の葉を洗い、乾燥させ細かく袋の中で砕いた物と、更にミキサーと茶こしでパウダー状にしたもの二種類を子どもたちと事前に準備した。石鹼素地と、好みの桑の葉を混ぜ、水を加え好きな形に整え完成することができた。 	
	

第1回 令和7年4月24日 午後3時半～

- 1 司会・議事録担当について
ICT 活用の目的
子どものより良い学び・育ち
今後の社会状況を見据えた先進的取り組み
- 2 ICT 活用の経過
- 3 検討内容・項目
 - ① 研修に関する協議
 - ② ICT 活用に係る年間計画
 - ③ 各施設の ICT 活用に係る共有 各施設活動内容報告
公開保育に係る共有
いいね！シートに係る共有
 - ④ 活動報告冊子の作成
- 4 今後のスケジュール
- 5 ICT 展チャイルドケア2025について
- 6 その他 タブレット管理について

第2回 令和7年5月29日 午後3時半～

- 1 チャイルドケア展について
- 2 いいね！シート共有
各施設活用内容報告
- 3 活動報告冊子に関する協議
 - ① 実践事例 内容について
 - ② 実践事例 掲載数について
 - ③ 各園分担決定
- 4 その他

第3回 令和7年6月26日 午後3時半～

- 1 いいね！シート共有
- 2 ICT 冊子についての具体的構成の協議
 - ① 各園所実践記録内容確認
 - ② 冊子進行状況確認
- 3 その他 ICT 展チャイルドケア2025について

第4回 令和7年7月24日 午後4時～

- 1 いいね！シート共有
- 2 ICT 冊子について具体的構成の協議
 - ① 各園所実践記録内容確認
 - ② 冊子進行状況確認

3 その他 ICT展チャイルドケア2025について最終確認

第5回 令和7年8月7日 午前10時～

- 1 関西教育 ICT展チャイルドケア2025 インテックス大阪にて
芦屋の保育でICT!～ICTを活用して探求心を深める～
芦屋市長登壇
芦屋市立認定こども園・保育所 保育士3名セミナー登壇 令和6年度実践報告
チャイルドケア 芦屋市立認定こども園・保育所ブース出展

第6回 令和7年9月25日 午後3時半～

- 1 関西教育 ICT展チャイルドケア2025を終えて
- 2 いいね!シート共有
- 3 実践記録内容共有
- 4 冊子作成について
 - ① コメント修正期間の確認
 - ② 今後のスケジュール確認
- 5 その他

第7回 令和7年10月23日 午後3時～

- 1 関西教育 ICT展チャイルドケア2025動画共有
- 2 ICT冊子について具体的構成の協議
 - ① コメント確認・修正
 - ② 講演内容の確認
 - ③ 今後のスケジュール確認
- 3 その他

第8回 令和7年12月25日 午後3時半～

- 1 冊子作成について
 - ① ICT冊子仮製本版確認、修正
 - ② 今後のスケジュール確認
- 2 来年度ICT冊子の検討
- 3 その他

第9回 令和8年1月22日 午後3時半～

- 1 いいね!シート共有
- 2 今年度委員会の振り返り 構成メンバーについて
年間スケジュールについて
冊子について
- 3 次年度に向けて
- 4 おわりに

芦屋市立認定こども園及び保育所 ICT 活用検討委員会委員

委員

池 永 直 子	精道こども園	園長
澤 崎 洋 子	岩園保育所	副所長
志 熊 亜 美	岩園保育所	主査
上 岡 朱 里	緑保育所	主査
青 木 帆乃伽	精道こども園	保育教諭
辻 知 香	精道こども園	保育教諭
村 上 里佳子	西蔵こども園	保育教諭
樋 口 恵 衣	西蔵こども園	保育教諭
濱 口 真三子	緑保育所	保育士

事務局

藤 原 弘 美	こども福祉部こども家庭室ほいく課	係長
長 澤 淳 子	こども福祉部こども家庭室ほいく課	

(以上、順不同)

芦屋市立認定こども園及び保育所 I C T活用検討委員会設置要領

(目的)

第1条 この要領は、本市認定こども園及び保育所における就学前教育・保育の質の向上を図り、子どもの最善の利益に資するため、就学前教育・保育において I C T 機器を活用するに当たり、その活用に係る各種検討等を行う委員会を設置するために必要な事項を定めるものとする。

(組織)

第2条 委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 市立認定こども園及び保育所に勤務する施設長又は副施設長
- (2) 市立認定こども園及び保育所に勤務する保育士又は保育教諭
- (3) 市立認定こども園及び保育所を所管する部署に属する職員
- (4) その他委員会が必要と認める者

(協議等事項)

第3条 委員会は、主として I C Tに係る次の事項について協議等を行う。

- (1) 市立認定こども園及び保育所における就学前教育・保育への活用に関すること
- (2) 事例紹介・研究に関すること
- (3) 研修に係ること
- (4) 制度・状況の共有に関すること

(開催)

第4条 委員会は、月1回程度開催する。ただし、開催については、委員会において開催回数等を調整することができる。

(その他)

第5条 この要領に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項については、委員会で協議して定める。

附則

この要領は、令和3年4月1日から施行する。

おわりに

芦屋市立認定こども園・保育所では、これまで教育・保育の場に ICT を積極的に取り入れてきました。子どもたちが「もっと知りたい」「調べてみたい」と感じた時の探求や遠隔の方々との交流、記録を通した振り返り、また思いや考えを他者に伝える手段として活用しています。その時々が必要に応じた活用は、子どもたち主体的な学びを支える大切な役割を果たしてきました。こうした実践を記録し、冊子として残すことで、子どもたちのより深い学びにつながることを願っています。

また今年度は、芦屋市の高島峻輔市長とともに、関西教育 ICT 展・チャイルドケア展において実践報告や冊子展示を行いました。来場者の皆様からは、活用方法について多くのご質問をいただきました。このような貴重な機会をいただいたことに心より感謝申し上げます。

本冊子に記した事例や取り組みが、皆様の教育・保育活動の参考になれば幸いです。そして何より、子どもたちの明るい未来を支える力となることを願っています。最後になりましたが、これまでご指導・ご協力を賜りました多くの皆様に、あらためて深く感謝申し上げます。今後とも変わらぬご支援とご指導をお願い申し上げます。

令和 8 年 3 月

芦屋市 ICT 活用委員会 委員 一同

発行日	令和8年3月
編集・発行	芦屋市立認定こども園・保育所 ICT活用検討委員会
芦屋市HP	ICTを活用した教育・保育活動
表紙写真	タブレットを使って盆踊りのチケットを作っているところ

